

日本学生オリエンテーリング選手権

(インカレ) 資料集

目次

- 1 1998 年度日本学生オリエンテーリング選手権
- 2 2001 年度日本学生オリエンテーリング選手権
(矢板インカレ)
- 3 日本学生オリエンテーリング選手権 記録集

1998 年度日本学生オリエンテーリング選手権

はじめ

1998 年度 4 月、僕は筑波大学に入学し、オリエンテーリング愛好会に誘われた。オリエンテーリングなんて中学のときの集団宿泊でレクリエーションとしてやったくらいであったが、新歓イベントでいい順位が取れたこともあり、ちょっとやってみようかなという気持ちになり入会した。

はじめ、愛好会ではオリエンテーリングそのものよりも、個性豊かな同期との付き合いが楽しくって、オリエンテーリングはそのおまけだった。新歓でいきなり搜索されたムラニコフ、安田教の教祖として一世を風靡した先生、同じ四国出身のわかめ、戦車、などなど、飲み会や学祭でのタコス屋出展に向けた準備を通してお遊びサークルとして参加していた。

そのため夏合宿で行われた筑波杯の長く苦しいコースを走るのは辛くて辛くてたまらなかった。なんでこんな頑張らなくてはいけないのかな？と思いつつ…



しかし、それがある出来事から変わっていく。それは日本学生 OL 界の最高峰であるインカレであった。この年は、9 月にショートディスタンスが岐阜県で、3 月にクラシック・団体戦が山口県で行なわれた。

インカレショート

僕はインカレというものの存在や意義というものをほとんど知らなかった。ショートの前日もどこに行くのかも知らないまま、大脇さんカーに乗せられ、村上(95)さん・吉村さんというメンツの会話に耐えながら気づいたら馬籠にいた。

夜、宿でミーティング。このときの緊張感に戸惑った。なんなんだこれは？といった感じ。村上さんたちのとてもここでは言えないような車の中での会話が夜には最高潮に達すると思っていたら、みんなとっとと寝てしまったし。

当日もよくわからにまま普段と同じようにレースをした。たしかにいい感じのレースではあったがそんなに結果に期待していなかった。しかし結果は 2 位。はじめて表彰される。しかも大勢の観衆のいる舞台の真ん中で…

このとき僕のなかで何かが変わってしまった。それは今まで遊びのうちでしかなかったオリエンテーリングが大学生活の全てをかけるものになった、大袈裟ではあるがそのくらいの精神的大革命が起きたのであった。

それは自身が表彰されたことにもよるが、村上さんが優勝したことにもよる。ものすごく気迫のこもった走り、それを応援する愛好会とその関係者の姿、それを見る他の大学の人たちの姿に大きなショックを受けた。そして、他大学の同学年のライバルとなる人たちの存在も...



競技オリエンテーリングの面白さ、快感、そういうものに触れたことでオリエンテーリングももっとがんばってみようと思いはじめた。

3月まで

そういうわけで、インカレショートの前に行われた関東新人戦でもメダルもらってやろうと思っていたものの、まぐれはそうそう続くはずもなく、惨敗。勝つには練習が必要だなという感じ、今思えばたいしたことをしてはいなかったが、週に何日が走るようになった。

大会でもいい成績を残してやろうと思うものの、なかなかうまくはいかず、でもそれでもオリエンテーリングが楽しくって続けた。そういう時間が続くうちに、いい成績をという気持ちだけが残って、努力という文字が消えていった。

そして3月が近づく。3月に向けていろいろ動きがあり、愛好会の雰囲気も再びピリピリしたものに変

わっていく。このときはインカレの意味をわかっていたので、「やあ、またショートときのような大会がやってくるんだ」と楽しみになってきた。

インカレ

そして3月第2週週末がやってきた。僕たちにとって初めて春インカレ。

静岡での直前合宿の後、数日のうちに愛媛に帰り、開会式の日の未明に実家からフェリーで山口入りした。このときのインカレは筑波からかなり遠いということもあり旅行気分であった。

小郡駅で内田さんたちと合流し、レンタカーでモデルイベントへ。ここで筑波から来た人たちとも合流した。モデルイベントでは増田と未生とでカルスト地形を眺めにいった。雨混じりの天気ですでに冷たい風が吹く中、明日からの舞台となる場所を眺めていたのを覚えている。

その後開会式場に移動して、開会式を見た。出たというよりは見たといったほうがよい。そんな感じだった。シード選手紹介で筑波の先輩たちがたくさん出ていて、誇らしい気分になった。村上さんの白鳥姿には度肝を抜かれた。その姿の前には、篠原さんの金髪も高橋さんの肉体美も霞んで見えた。

宿舎に移動して、次の日の準備やら打ち合わせやらをした。ホテルの温泉がすばらしく、ちょっと感動。インカレって一つの旅行みたいなものだなと思った。バスの出発時間を確かめて、同部屋の人と大富豪を少しやったがなんとなく緊張していたので、すぐ止めて寝た。よく寝れた。

朝起きて、会場へと向かうバスに乗る。会場に着いて、場所取りされた筑波の陣地で準備を始めた。トップスタートに近かった増田はそろそろ終盤にさしかかったかな？と思った時、増田が会場に現れゴールした。早かった。これには度肝を抜かれた。タイムは35分とかそんな感じだった。予想では40分ちょいがウイングと考えていただけにかなり驚いた。このタイムに勝てるか？そう思った。そしてこのとき、自分が優勝を目指していたことに再び気付くことになった。

スタートに向かう。勝つためには速く走らなくては。アップも気にせず駆け上がらなくては。そんなことを考えながらスタートした。フルオープン区間は非常に気持ちよかった。順調だった。しかし1つの小さなミス。さらに小さなミス。そんなことを繰り返しているうちにタイムは40分を超えた。そしてゴール。入賞できるかも微妙だった。

結局入賞もできなかった。増田と武政が表彰されるのを見て、はじめて本当の悔しさを知った。



選手権も佳境だった。先輩たちが次々帰って来る。村上さんの中間タイムが知らされた。かなりいいタイムだった。優勝は村上さんで決まり。そんなムードがみんなの中に流れていた。そしてゴール。しかし7秒差で2位だった。人のことなのに悔しかった。ゴール後しばらくして村上さんが一年生にも「今日のレースどうだった？」と聞いていた。僕にも聞いてくれた。この人はすごい人だと感動した。

そんなこんなでクラシックは終わった。女子では大谷さんが優勝。上松さんと塩田さんが2年生ながら入賞した。篠原さんも入賞した。そんな先輩たちをみてきっといつかは表彰台に立ちたいと思った。

宿舎に戻り、次の日のリレーのミーティング。僕は一年生のトップチームからはずれることが確定した。初めはそれでもいいやと思っていたが、この日見たものを思い出すと悔しくなった。けど僕のチームも可能性のあるチームだった。明日こそやってみよう。選手権の男子・女子の代表の姿を見て頼もしく思った。優勝したらどんな風になるんだろう、と楽しみだった。

リレーの日、応援合戦にまたしても驚いた。藤城さんの前口上(応援の前フリ)が聞けたのは嬉しかった。そして次々とスタートした。



選手権がどうなっていたのかよく覚えていない。けど男女とも優勝を狙えるところにいた。1年トップチームの1走の増田がなかなか帰ってこない。一年みんなまで心配した。僕のチームも少し出遅れた。少しずつ可能性が消えていく。そんな気がした。順位がどうなっているのかはわからない。そんななかで僕のスタートがまわってきた。

早く帰ることしか考えていなかった。レースはどうだったのかは覚えていない。いいレースではなかった。

無我夢中。オープンに出たところで、筑波女子優勝のアナウンスが風に乗って聞こえた。男子はどうなったのだろう。そんなことを考えたのは覚えている。



そしてゴールへと戻ってきた。結果はわからなかった。しかしいい結果とは言えないことは確かだった。そして選手権での女子の優勝、男子の厳しい状況を聞いた。そこで気が抜けた。はげしい脱力感。会場から離れた更衣所でボーとしていた。内田さんが来た。「村上さんが戻ってくるから応援しよう」やっと我に返った。

帰ってくるのを待つ。村上コール、筑波コールが繰り返される。東大がウイニングラン。次に東北大が見えた。すぐ後ろから村上さんが来た。がんばれガンバレ！それしか言えなかった。そしてゴール。雨の中涙ぐみながら円の中に入る代表4人。勝てなかったけど、そんな姿に憧れた。



そして表彰式から解散までは覚えていない。気が付いたら船を降り、松山にいた。さっきまでの興奮が夢のような気がした・・・

こうして初めての3月インカレが終わった。今でもこのときの光景は鮮明に残っている。この日から3年間、いつもインカレのことを考えていた。そのときは3年後、本当に自らが村上さんたちのような立場になっているとは思ってもいなかったが。

インカレは、もちろん参加するだけでもとても素晴らしい大会であると思うが、できることならばぜひとも優勝を争う選手として参加してもらいたい。そんな場面を経験できる人はこの世の中そう多くはない。たとえ経済的・時間的なコストを負うとしても、そこで結果を残すために行う様々な経験・出会いは、きっとその人の人生を豊かなものにするには間違いないのだから。

2001 年度日本学生オリエンテーリング選手権 (矢板インカレ)

矢板インカレへ向けた準備

11月の埼玉公認から12月の筑東戦までレースがうまく組み立てられない、ライバルに勝てない時期が続いた。そこには絶対に勝ちたかったインカレショートと本セレも含まれていた。魔の一ヶ月、そんな感じだった。

理由はわからなかった。なんとなくリズムが悪い。アナリシスはあまり変わらない。けどどこかで歯車が合っていなかった。埼玉公認では完全に頭が飛んでいた。ショート対策練では小さなミスで済んだところを無理して傷口を広げてしまった。インカレショートも本セレも筑東戦もそうだった。

なぜだろう？体力が不足しているのか？プランニングの時間が短いのか？基本的な技術が下手くそなのか？プレッシャーに負けているのか？

そのころにはインカレへ向けた準備を始めなくてはいけなかった時期になっていたとりあえず過去のアナリシスと今のアナリシスを比較。どこか変わったところがないかを探した。これだ、というほどのものは見つからなかった。康史さんの文章も読み返した。しかし、明確な答えは出なかった。

そこで課題を1つ設定した。

止まらないこと。

今までは、ミスが恐ければ止まってしまう、それでミスが防げるならOK、という気持ちでやっていた。

止まらないためにはどうすればいいか？どこに意識を向け、どのタイミングで何をすればいいのか？そのことを体に覚えさせるには？いろいろ考え試してみた。いばらき大会、M杯の試走、北東セレの試走。この辺りから少しずつリズムがよくなってきた。新年合宿や静大大会ではミス率が多少下がってきて、タイムも安定してきた。そして1月の半ば、このオリエンテーリングでインカレを戦うことを決めた。

1月から2月中旬は走りこみの時期だ。今までにないくらいの距離を走り、スピトレで佐々木や高橋さんになんとか最後まで付くようにした。膝が弱いので、膝まわりの筋トレをして負荷を上げられるようにした。ケアはしっかりする。マッサージ、アップ・ダウン、ストレッチ、食事をきちんととる、栄養バランスにも気を配る、うがい・手洗いは常にする。

学連リレーのころが最大負荷。その後は少しずつ疲れを抜く。

ちょうど1ヶ月前から下野軌道・熊ノ木・前高原の地図で毎日25レグ1往復を読みつづけた。ラインを引く、CPを設定する、そこで何をやる、どういうミスがありそうか、スピードコントロール、林の風景を想像する。けっこう疲れるくらい地図を読んだ。

インカレでのレースをひたすらイメージした。モデルは高橋善徳さんであった。日光インカレの個人戦で僕は高橋さんと一緒に行動することができた。朝起きてからバスに乗るまで何をしていたかうすらと覚えていたのでそれを思い出した。山の中で一緒にいることもあった。どのくらいのペースだったろう？2年生だった自分でもついていけるくらいのペースだった。どういうプランを立てていたんだらう？今の高橋さんほどすごいレースをしていたわけではないはず。そう、今まで以上に止まらないことを課題にしたのも高橋さんのインカレでのレースを思い出したからだった。

とにかくすべてのトレーニングで本番を意識していた。どちらかといえば個人戦よりも団体戦に勝つことを強く意識していた。4走で行くことは2月には決まった。後ろから金澤に追いつかれたら？最初から許田や加藤と同じだったら？ラスポで勝負になったら死ぬ気で走る。そのため非常に緊張感を持ってトレーニングができた。

団体戦で勝つために自分に求められる力は十分あることは学連リレーで確認できた。では、個人戦で勝てるのか？その可能性を見ることができたのは中止になった会内セレであった。

2月3日の会内セレは大雪で中止。平日に撤収に行った。ついでなのでコースも回るようになった。タイムを見ると、一緒に行った高橋さんとはだいぶ差をつけられた。しかし、いくつかのレグで高橋さんを上回るラップが出せていた。別にそのレグだけ必死にがんばったわけではない。普通にやっただけなのに、高橋さんよりだいぶ早いレグもあった。

結果が出てきた。常にそれを、は無理でもできるだけ長い区間で今回のようなオリエンテーリングができればインカレで勝てるのでは？そう思ったときから「個人戦も勝ちたい、けど勝てるかなあ・・・」というもやもやしたイメージから「個人戦で勝つには・・・」というリアルなイメージができるようになった。

そしてインカレを迎えた。さすがに個人戦で絶対勝

てるところまではいけなかった。しかしその可能性はショートの時よりもはっきりと見る事ができた。インカレで勝てるための理想のレースに対するイメージが完成していた。団体戦は言うに及ばず。

個人戦アナリシス

地図はないです。すいません

体力

1月、2月の走り込み期間で、十分な量と質をこなせ、またその後の調整期間には疲れを抜き、風邪をひくこともなくインカレの日の朝を迎えられた。体に関してはなんの心配もなかった。

スタート時間が遅いので、朝食をたくさん食べ、待機所に向かう。軽くアップをし、時間をかけてストレッチ、その後時間をかけてアップ、軽くダッシュして刺激を入れてスタートへ向かう。

技術

下野・熊ノ木のマップは嫌になるくらい見た。スタート位置がだいぶ予想と違うところにあったが、その辺りもリレー対策でたくさん見ており、いかなくても地形がイメージできる。プランニングに不安はない。自分のプランを最速と信じて迎えるだけ。斜面を斜めに切る直進にやや難あり。

精神

レース中は課題をこなすことに集中。練習会くらいのつもりでやる。

待機所でコンタクトをつけようとしたら、意地悪な風が吹き、コンタクトが飛んでいく。瞬間「やばっ」と思ったが上松さんに頼んで、みんなで探してもらった。あっさり見つかる。「これはツイている。今日はいけそうだ。」と根拠もなく自信が湧いてきた。

課題

勝ちたい。しかし、自分には絶対勝てるというほどの力はない。けど直前の大会や練習会を見て、みんながお互いベストのレースをすれば最低でも2、3位にはなれる自信があった。だからまずその位置につけられることを第1条件にする。ミスしなければそこにはいける。だからミスしないことに集中する。そのためには？

直進、特に斜面を斜めに切る直進に不安があった。だから直進は必ずエーミングオフする。どんな簡単な直進でも横にはずす。横にはずすことはロスではない。リズムをよくするためのタメ。

プランニング。地図のほとんどは頭に入っている。プランはすぐできる。しかし真っ直ぐなラインが見えても、遠回り

でもシンプルなラインを探し、見つければそっちをいく。迷った時はアップの量を見て決める。

60分。いつもレース開始60分前後でミスをする。この時間帯になったら注意。基本的な手続きに集中。そのあたりから最後にあるであろう道走りまでは徐行区間。

あとは最近取り組んでいること。CP周辺の動き。詳しくは康史さんのホームページ。

上のことができればミスはほとんど生まれえない。あとは周りがミスしてくれるのを祈るだけ。でもそのことはレース中には考えない。自分が一番いい方法を選択していると信じる。

アナリシス(プラン・実行・反省)

1

畑沿いの道に出るまではコンタリングしてくれる道を使って、最後に尾根を切って、鞍部に出る。そこからひたすら道を走り、民家の先から沢に入って、尾根を切って、沢の明るいところの南から沢に入って、そのまま詰めて尾根上からアタック。APは道の曲がり。尾根上にある穴。

長い、しかしラインはすぐ見えた。畑沿いの道走りですべてのプランをしよう。それまでは道に出ることに集中。道に出てからは前を行く女子に追いつけないペースで地図読み走。どのレッグもすぐにラインが引け、取捨選択もあっさりできる。民家の手前ですべてのレッグのライン引きが完了。1ボまでのラインを迎えるだけ。

ラインをたどること自体は問題なくできた。ただアタックで歩測を怠り、少し不安を覚える。アタック3原則は守ること。

1 2

道まわりが真っ直ぐか。真っ直ぐでもコンタ3本くらいしか変わらなかったので真っ直ぐを選ぶ。沢底の道に出て、尾根上まで走る。そこから真西に尾根を切り、沢底のオープンから道を南に。右手に尾根がなくなったらその向こうに広がる平らな林を抜け、沢を登る。尾根上は特徴的な地形が広がるので、それをたどって2ボのある沢に入っていく。

特徴的な地形の手前の斜面から結構ヤブくなる。ラインをたどることに集中。2ボのある沢に入ったものの視界が悪くよく見えない。地形、方向を確かめ歩測をしながら降りる。眼力MAXでオレンジを探したら見つかる。

結果論だけど、道まわりのほうが楽。

2 3

真っ直ぐめにコンタリング。3つ目の沢。

脱出で真っ直ぐ行きたかったので、コンパスで方向を定めて進む。2つ目の沢が結構深く、一瞬3ボのある沢かと思いつまってしまう。地図で深さを確認し、1つ先の沢へ。地形情報を忘れないこと。

3 4

尾根上に出て道を走り、真ん丸いピークを左手に見て、北にある道上のオープンへ。そこから鞍部を越えて沢に入って、沢底のヤブを左にまく。

ラインをたどること自体に問題なし。

ブランの段階で左の道走りも見えていたが最初に下るのでアップ損するなあ、と嫌ってしまったがよく見るとそっちのほうが楽。けどあんまり気にしなくてOK。

4 5

アタックしてきた鞍部に戻り、道に乗って分岐からアタック。この距離なら直進は大丈夫。けど尾根を越える感じの地形になっていることに注意しておく。

鞍部まで行ったが、いつのまにか道を切っていたらしく、斜面にまで出てしまった。道に戻るために左にずれていくが、なかなか道が見えない。フラフラと道を探していると道が見えてきたので、とりあえずそれに乗り、リロケートしようと方向を確かめ、周りの地形を見るとポストが見えた。周りの地形と照合し、イメージとあっていたのでそのままアタック。

鞍部上の道なので安心しきっていた。ここは広い鞍部なので、鞍部のどの辺りかまで注意するべきだった。そして道に乗れなかったら素直に戻るべきだった。

5 6

南に斜面を下り、沢底の道を使って東の尾根に乗る。尾根上の道をたどって変換点から斜面を下り6ポにアタック。

脱出で斜面を下るときに道を使おうと思ったのに、またしても道に乗れず仕方ないのでそのまま林を下る。尾根たどり以降は問題なし。

6 7

道に出て、立禁エリアの縁まで走り、オープンのある分岐を左に行き、次の分岐からまっすぐピークを上って、向こうの斜面の沢に入る。

ピークを上っているときにAPを探す。たまたま一番高い位置にある道の終わりが見えてきたのでそこから7ポの南の尾根に出てアタック。

7 8

沢の分岐から道に乗って曲がりから直進。尾根の下に当てる。問題なし。

8 9

尾根上の道に出て、オープンまで下り、2つ目の道分岐を過ぎた辺りから南の道に乗り換え、T字路からCヤブを右に巻いて、その角から9ポの北の沢に当てる。

脱出でしっかり道に乗りたいので、南に伸びる沢を詰める。アタックは斜面の方向が変わる地点だけを意識して上る。

脱出で詰めていた尾根がさらにその先で分岐していることに気付かず、少し距離を損した。脱出していく先の地形も意識できれば良かった。このへんのアップを上るときにいつもなら苦痛を感じるのだが、今回は楽に上れた。これが高橋さんや村上さんが言っていたアドレナリンが出ている状態なんだと気づき、今日はいいレースだと感じる。

9 10

南の鞍部に出て、右側の斜面の道を走り、湿地の南辺りを切って、道に乗り、そのまま道を使ってアタック。

最初の尾根分岐だけに気をつける。道に出た時に足がツリそうにな

る。けっこうスピードを出してきていた事に気づき、また終盤に差し掛かるのでスピードを落とし、最後にミスしないように気をつける。

10 11

南に下って道に乗り、小径を使って植生界との交点に行き、そこから11ポの北の鞍部を目指し、そこからアタック。問題なし。

11 12

尾根を南に上り、左の補助コンピークとの鞍部を越え、沢底の道に出る。そのまま道を走って、12ポまで伸びる道に乗ってアタック。

12ポまで伸びる道に乗るつもりが、一本南の鉄塔に伸びる道乗ってしまった。すぐに気付いたが、戻るのも面倒だし、このまま行っても難しいわけではないので鉄塔まで行き、真北にアタック。

鉄塔までたどる道が見えておらず、また道に乗ることだけを考えていたため道を乗り間違えてしまった。道の分岐がAPであるわけだから、そこでAPを確認。アタック3原則+1を怠ってはダメ。

12 13

沢の道に出て13ポの南の植生界まで行きアタック。問題なし。

13 14

ひたすら走る。会場の入り口が見えたとき、ものすごい声援だったのでギリギリなところなのかと思って必死に走る。

総評

結果は優勝。他の選手がミスをしたのかしなかったのかあまり詳しく聞かなかったが、たぶん理想の展開に持っていけたのだろう。ミスをしないことだけに集中したおかげ。

しかしミスがなかったわけではない。いくつかミスをしている。勝因は？とよく聞かれたが、それはたぶん事前の地図読みにある気がする。レース後に運営者に呼ばれて許田や金澤と一緒にレースについてのコメントを求められたが、その2人よりも明らかに地図・地形に対する記憶が鮮明だった。1ポまでの道走りですべてのプランが立てられたのも地図読みによるところが大きい。1度はやったことのあるようなレグばかりだった。けどそれでもミスはした。しかしそれは自分がイメージできる範囲内のミスであった。なぜそれをイメージできたかは、やはり事前の地図読みで「ここではどんなミスをしようか」ということまで認識していたからだろう。だからミスしても落ち着いていたし、次のレグでは良いらリズムに戻れた。

地図から地形をイメージする、そこで起こりうることをイメージする。これが初見のマップでできればその人こそ天才だが、きっと多くの方はそれまでの経験とそのレースへの対策としてレースの前にそれを行っているのだろう。自分もそのうちの一人であることは確かだ。



団体戦について

- ・目標 **優勝**
- ・メンバーセレクション

関東インカレ(本セレ)・静大会・独自レースの3本中よかったレース2本のポイント合計。ポイントは上位2名の平均を100とする。

結果、佐々木(静 102.31・独 102.72)増田(本 106.34・独 92.72)小泉(静 97.8・独 97.42)武政(静 95.64・独 80.27)が選ばれる。

- ・走順・対策
武政 - 佐々木 - 増田 - 小泉

武政は、普通にやればトップから3~5分で帰ってくるだろう。いや、その差の範囲で帰ってくるかで決まる。その差を残りの3人で消していけば最後に勝てる。たとえ上位校のどこかが1走でぶっちぎっても、10分差までなら取り返せる。

この走順の利点。みんな普段以上の力を出すことを期待されない。無難に帰って来られれば、いつのまにかにトップになっていることができるから。一番不安定な武政を落ち着かせるためには、後ろにシード3人を持ってこることで精神的に楽にすること。多少遅れても勝てると思えること。

弱点。大きなミスは許されない。けどそれはリレーにおいては当たり前のこと。

ライバルは東北大・京大・東大・早稲田あたり。

早稲田は3走まではいるかもしれないが、4走で勝てる。

東大も同じく3走までで前にいても、4走で勝てる。3走までで東大が筑波の前にいるためには加藤を2走に使わざるを得ないから。加藤4走なら下記の2校とだいたい同じ状況。

京大・東北大には3走までで前に出しておきたい。

この2校には3走までで勝負できるか。

京大の場合、1走新宅なら、2走までで抜けなくても3走までで抜け、4走で逃げ切れる。岡野1走、新

宅3走だとそれが難しいが、4走ガチンコ勝負には持っていける。岡野・新宅・西尾・許田だと2走までに抜いていないとどうしようもない。相手のミスを祈るだけ。自分たちはあくまで無難に帰ってくる。

東北大は、堀江1走なら京大の新宅1走と同じ状況。4人目が1走、堀江3走も上と同じ。そして4人目・堀江・禅洲・金澤だと2走までで前にいられると京大以上にどうしようもない。2位に位置して棚ボタねらい。

だけど、京大も東北も筑波にとって最悪の走順では来ない気がした。2走にプレッシャーがかかりすぎる。あまりにも大きな賭けだから。リレーにおいてそこまで賭けるのは相当な覚悟が要る。去年の筑波が佐々木を1走に使わないくらいの覚悟がいるから、それはない、と思った。(と、書いたら康史さんに同じことを先に書かれてしまった・・・)

もし上で想定したこと以外のが起こり、トップと大きく差が開くことがあれば2位に付けること、あるいはトップ集団の下につけることを考える。そして上が大きくツボることをひたすら願い、自分たちはミスなくその位置にい続ける。無理に狙わない。

とにかく筑波の4人に求められることは、無難に帰ってくること。無難に帰ってきにくい武政が無難に帰ってくるかで決まる。もし周りが崩れ武政がトップで帰って来られたら、あるいはTOP集団であれば、楽勝でブッチぎれる。1~3分以内なら3走までで勝負がつけられる。5分差程度なら最悪でも4走勝負に持ち込める。最悪10分差以上つけられると2位狙い、3位狙いに切り替える。

- ・共通の意識

リレーメンバーには以下のことを共通の意識として持つことを確認。

ペナらない。地図を取り間違えない。

ルートプランで真っ直ぐな尾根切りや尾根たどりのラインが見えたとしても、遠回りだけシンプルな道走りのようなラインを探す。それが見つかれば迷ったら、後者を選ぶ。

すべてのメンバーはその走順、あるいはコースパターンのトップタイムを出す必要はない。トップから1~2分のタイム(武政は3~5分で十分)を出すつもりで走る。そういう走りをすれば、結果として1、2人はトップタイムになるもの。

・結果

1走 武政。第1中間まではトップ集団につけている。このままで帰って来いと願うも、第2中間でなかなか名前が呼ばれない。もしかしてもう通り過ぎたのかも、などと思っているうちにトップ集団がタッチ。それでもビジュアルに現れない。トップゴールから15分が過ぎ、自分の中で優勝を諦める。それは非常に辛い決断だった。あまり知らない大学の選手もどんどんゴールしていく。そして約30分後に武政から佐々木へ。

2走 佐々木。佐々木にはスタート前に、「入賞を狙う。しっかり走れ。けど無理はしてはダメ」と言っていた。それができるかは佐々木しだい。来年のためにもそれは求められる。その間に立ち崩れる武政をたたき起こし、増田と情報交換。道走りが多く、一番北あたりで難しい。ビジュアル後のポスト数は少ない、コースは簡単。武政にしては十分な情報を提供してくれた。

3走 増田。帰ってくるのを待つだけ。自分は準備をするだけ。佐々木から鞍部のポストが見えにくいと言うことを聞き、畑を切る具体的な場所までわかった。頭の中ですでにコースは出来上がっていた。

4走 小泉。スタート枠にまだ金澤がいることが意外だった。東北も崩れたのか。一番の優勝候補であった2校がここに残っていると考えると、複雑な気持ちになった。



最終順位は5位。

優勝はできなかった。しかし事前の想定どおり3走の増田までで筑波にとっての勝負は大体決まっており、すべて予定通りの展開であった。想定したシナリオどおりにできたのでリレーとしてはよかった、とはそんなところからきた言葉だった。



しかし不思議なもので、4人のタイムは会内セレをそのまま表している。最高ポイントを出した増田が一番いいタイムで、安定して速かった佐々木がその次。セレではトップになれなかった小泉はその次にいて、変動の大きかった武政は本セレで出してしまったポイントそのまま出したところ。結局、セレ以上のタイムは出せないということか。それは女子でも同じだった。そのことを考えると、これからもセレでメンバーを決めるようにしてほしい。セレ以上のタイムは出ないことを前提に走順を考え、走り方を考えてほしい。

そもそも去年、今年のセレは安定して速い選手が代表に選ばれるためのものであった。しかし、そこに不安定な武政が残った時点で勝負は決まっていたのかもかもしれない。それは武政自身が安定できなかったこと、他の選手がもっと伸びることができなかったこと、そして彼らの成長と安定を手助けできなかった自分に責任がある。

勝負に負けたのは悔しい。

しかし去年とは違う涙だ。

去年は勝負の土俵に上がれなかったことへの悔しさだった。

しかし今年は土俵には立てた。すぐに押し出されてしまったけれど。

それに負けたのだ。

そしてそれが悔しい。

しかしそのなかでも俺たちはきちんと走れた。

それがみんなに見てもらえたかったものである。

日本学生オリエンテーリング選手権 記録

ショートディスタンス

年	開催地	マップ名	コース	順位	自タイム	距離	アップ	トップ	トップタイム
1998	岐阜	「桜の湖ふれあい村」	MF1	2	0:20:36	2350	75	許田重治(京都)	0:17:36
1999	栃木	「日光所野」	MEQ2	13	0:31:09	3250	145	内山裕史(東京)	0:24:01
			MEFB2	P1	失格	2400	95	岩本育弘(東京)	0:50:39
2000	滋賀	「ガリバーの森」	MEQ3	4	0:19:43	2500	135	金澤拓哉(東北)	0:15:55
			MEFA	5	0:23:34	2730	135	紺野俊介(早稲田)	0:19:49
2001	石川	「加賀海岸」	MEQ1	1	0:21:29	3750	80		
			MEFA	4	0:23:23	3600	55	禅洲 拓(東北)	0:21:57

クラシック

年	開催地	マップ名	コース	順位	自タイム	距離	アップ	トップ	トップタイム
1998	山口	「秋吉台」	MF1	8	0:39:59	5700	-	増田佑輔(筑波)	0:35:01
1999	栃木	「日光霧降」	ME	45	1:55:02	11800	490	高橋善徳(筑波)	1:29:08
2000	愛知	「巴山三川分流」	ME	9	1:21:50	9900	540	安井真人(早稲田)	1:10:55
2001	栃木	「やしお」	ME	1	1:11:34	9900	425		

団体戦

年	開催地	マップ名	コース	順位	チーム(メンバー)	自タイム	トップチーム(メンバー)	トップタイム
1998	山口	「秋吉台」	MU2	33	筑波大学MM(鈴木 - 佐藤 - 小泉)	3:19:15	東北大学MN(奥山 - 駒崎 - 金澤)	2:22:49
1999	栃木	「日光岩裂の霊水」	MU2	1	筑波大学MJ(野口 - 小泉 - 銭本)	2:07:19		
2000	愛知	「作手高原白鳥」	ME	3	筑波大学(佐々木 - 小泉 - 野口 - 増田)	3:31:13	早稲田大学(西村 - 安井 - 大塚 - 紺野)	3:24:55
2001	栃木	「番匠峰古墳」	ME	5	筑波大学(武政 - 佐々木 - 増田 - 小泉)	4:20:03	京都大学(岡野 - 西尾 - 新宅 - 許田)	3:59:53

98年度団体戦の順位は全体での順位、トップ及びトップタイムは新人特別表彰対象チーム内でのトップ

その他主要大会(1998-2001年度)

2000年 東日本大会(M21A) 2位
 2000年 関東インカレ個人戦 4位
 2001年 東日本大会(ME) 10位
 2002年 関東インカレ団体戦 筑波大学(武政-佐々木-増田-小泉) 優勝
 2002年 全日本選手権 15位

会内杯

2001年 筑波杯
 2000,01年 あかつき杯
 2000,01年度 愛好会ベストオリエンティア
 2000,01年度 体トレ年間王者